

「バリさんの夢」

喜多川雅人

私はチューリッヒ生まれのバリーの黒靴です。二十五年前になるでしょうか、スイスに出張したご主人が、靴の底に穴があいたとかで、店に入って来られました。ご主人がどれにするか迷っているとき、「これが似合うわ、これにしたら……」という妙齢の女性の一声。ご主人が試し履きするとぴったりで。ソフトな感触が気に入ったみたいでした。『BALLEY』の銘柄が分かる縦横五x十五ミリほどのレットルが控え目についているのも気に入ったようです。

ご主人は、古いのは店に引き取ってもらい、早速私を履いて満足そうでした。並びの宝飾店で連れの女性に銀製のブローチを贈り、夕食を済ませると、駅から近い四星ホテルのスイートルームに戻りました。

連れ合いの妙齢さんは、取引き先の方のようにも見受けましたが、なにやらわけありの雰囲気部屋に漂っていました。ダブルベッドにはシャネルの5番が汗に絡んで漂い、上に下にと揺れる声もあつたりで、濃厚な一夜でした。

ご主人は靴にはうるさい方でしたが、相性がよかつたのか、現役時代には週二日はご一緒しました。お仕えた頻度は一番だと自負しています。行き先も祝宴とか、観劇とか、正装していく華やかな機会が多かつたと記憶しています。秘かなデートにお付き合いしたこと稀ではありません。

ご主人の退職後は、イタリア、ドイツ、イギリス、中国など国籍の違う多くの同僚たちと余生を送っています。棲むのは、ご主人のお宅の玄関にある作り付けの下駄箱です。仲間うちでは、「俺たち下駄じゃないよね」というわけで、英語に直して『Shoe Cupboard』と呼んでいます。

入居した当時は、左右色違いの洒落た布で覆われた引き戸が気に入っていましたが、今ではそれもよれよれです。ドアに向かって右側がご主人様用、左側は新築の頃は奥様用となっていたようですが、事情があつて今は空き家です。

三段に分かれたご主人様用は、上の二段が主に黒のビジネスシューズ、一番下がスポーツシューズ用と決まっています。各段に五足が収まる仕組み。一段毎の高さはスキー靴がゆったり納まるほど余裕があります。

私の定位置は一番上の左隅です。お声がほとんどかからなくなった今でも、草臥れきつた高齢者の仲間たちとスタンドバイしています。捨てられないのは、夫々に思い出があるからでしょう。

仲間を紹介しましょう。上段の左から、リーダー格の私ことスイス生まれの「バリー」、通称「バリさん」、隣は、イギリス出身の「クラークス」、通称「クラさん」。無骨で質実剛健といったタイプ。先が丸く幅広で、靴ひもで締めたり緩めたりできるクラシックな類です。次いで、イタリア出身の細身でダンディな「テイトロ・クラドック」、通称「ティ」さん。土踏まず部分がくびれたお洒落なチャッカブーツです。裏底は反り返ってつるつるです。滑りやすいので、雨天向きではありません。

その次は、手縫いの日本製。老舗のO製靴の出で、「Oさん」と呼ばれています。紐付きのスタンダードなスタイルで、柔らかな良質の素材が高級感を醸しだしています。右端は「クラさん」の腹違いならぬ色違いのクラークス。黒が好きなお主人には珍しく薄いブラウンなので、「ブラさん」と呼ばれています。フランス出身がいないのは、ご主人にいわせると、靴に限っては、フランスのはイギリスとイタリアが混ぜ合わされたみたいで気に入らないからだそうです。

二段目は黒靴ばかり。ブランド物でない使い捨てタイプです。一段目はすべて皮底ですが、二段目は雨などの荒天にも強いゴム底の通勤用です。そこその値段の国産の既製品が四足。愛称もなく、その他大勢組といったところでしょうか。ご主人の足がちよっぴり湾曲しているのか、左側に傾いて磨り減った踵がなぜか寂しい。あまり磨かれた憶えがない艶のない顔が並んでいます。

残る一足がユニークで、中国製です。なにか謂れがありそうです。中段の住人で彼だけは愛称を貰っています。「ワンさん」。中国語では「王」という感じですが、粗雑な造りでどう見ても王様といった風貌ではありません。

下段は、その他の種族で、「ナイキ」と「フィラ」のテニスシューズ、ドイツ製の高級登山靴「ローヴァー」、通称「ロバさん」。粋な散歩にぴったりという感じのバリーのスウェードシューズ。渋い濃紺です。もう一足は、スキーに出かけるとき用の毛皮の裏地がついたスノーブーツ。裏底は滑らないようにギザギザがついています。ざっとこんなところが一族の顔ぶれです。

ご主人様の仕事はトラベルライターでした。名前は渡辺悟。通称「ナベさん」。事務所は、表参道を原宿から青山通りに向かって上る坂の真ん中辺りを渋谷方面に折れてすぐの北青山にありました。社員が三十名ほどの出版社で、専門は旅物。正規社員の数は少ないとはいえ、エディターが中心で、記事、写真、イラストなどは契約している外部に発注することが多いですから、この業界では中

堅どころといったところでしょうか。

国別のガイドブックが得意な分野でしたが、『地球の歩き方』が現れてから、雲行きが怪しくなりました。流れが変わったのをすばやく「悟」ったナベさんの提唱で、経費削減と抜本的な編集刷新のため、自社製作から委託への切換えを探っていた某社の機内誌の制作を請負いました。これが大当たり。その波に乗って、ナベさんは大いに活躍しました。当時三十八歳だったでしょうか。会社の中興の祖というわけで、若干四十歳で取締役編集長に抜擢されました。勿論、トラベルライターの兼務です。

機内誌の制作は、一年間の月別編集企画が決ると、特集については、早目に手分けして取材の準備に入ります。トラベルライターのナベさんが特集の総括を務めます。アシスタントがつくこともあります。取材旅行は、ナベさんとカメラマン、それに著名な女優さんとか、作家とかの著名人が加わり、三人から四人のツアーになることが多いようです。

旅先では、異国の場合、現地でガイド、通訳などを雇います。トラベルライターとはいえ、旅の手配、アポ、接待、原稿書き、清算の実務などと、結構ハードですが、余禄も多く、ナベさんはこの仕事をすっかり握って、退職する直前まで手放しませんでした。

ナベさんは、末っ子の一人息子で、お姉さんが二人います。長野の旧家の次男坊だった父親は、上京して大手生保の役員まで上り詰めたので、まずは裕福な家庭に育ったといっってよいでしょう。

お嬢さん育ちの母親の身体が弱いこともあって、子供が生まれると、長野の本家で長年仕えていた女性がお手伝いさんとして住み込んでいました。祖父の愛人という説もありますが、定かではありません。細身の母親と十歳も違わない年恰好のふっくらしたもち肌のおばさんでした。

姉二人だけの時代は割と平穩だったものの、長男の悟が生まれると、二人の女性を取り合うように可愛がったそうです。ナベさんが好きなものを競って調理する、おやつでご機嫌をとる、お風呂に入れてもらうのは保母さんの方だったから肌の触合いもありました。

幼い頃から複数の女性の身体を眺め、触れて育ったのです。小学校の中頃までは続いたでしょうか。保母さんは御伽噺を聞かせながら添寝してくれる。幼いナベさんの感情と心が微妙に揺れました。母親がそれを妬いて自分の方に取り戻そうとする。

二人の女性が奪い合うという羨ましく聴こえますが、形を変えながらも、そうした家庭内での奪い合いが少年期まで続いたのがナベさんの性格を複雑に

したようです。

ナベさんは特に女性との関係で、温かさと冷たさの裏表をもって複雑に接するのです。どつちだか捉えようがないといってもよいかもしれません。名前のように普段は「悟」ったような顔をしているナベさんがたまにハチャメチャな行動に走るのは、そうしたフラストレーションからかもしれません。

ナベさんが靴にこだわりをもち、詳しいのは、別れた奥さんが老舗の〇製靴の娘さんだったからでしょう。学生時代の先輩の紹介でお見合いしたのです。表の優しそうな顔に騙された純情な奥さんは、トラベルライターという落ち着かない稼業で内外を飛び廻り、女性関係など裏の顔をもつナベさんに愛想を付かして、三年で実家に戻ってしまいました。実は、奥さんは〇製靴のオーナーの後妻の娘でした。

オーナー社長には、亡くなった先妻に長男がいて、彼が家業を継ぐことになっていたようです。手広く事業をやっていたので、後妻の娘の婿さんには、いずれは事業の一部を委ねる心積もりだったらしい。

トラベルライターは浮き草のようなところがあり、先行き不透明なところがあります。で、ナベさんもそんなことを当てにしてお見合い結婚したのでしょう。新婚時代には、義父の誘いに乗って、週末になると製靴の現場や、靴屋の店頭で手伝うといった修業をしたそうです。靴の知識が豊富になりました。それが靴への愛着になって今にいたっているらしいのです。

舞台はワイガヤと賑やかなシュー・カップボード。

バリさん 「……と、まあこんなところがご主人様の成り立ちのようだね。

この間、六十五歳で高齢者入りしたついでなので、ナベさんの悪友たちが集まって大騒ぎしたのに付き合わされてね。そのとき、ちよっぴりしんみりしながらナベさんが明かしたついでというわけ……。ちよつと喋りすぎたかな。

ところで、たまには昔話でもしようか。ナベさんとの旅の思い出とか。順番に言ってごらんよ。クラさんからどうか……。――」

クラさん 「先発のご指名ですな。分かりました。小生の場合、ナベさんがイギリスのナショナルトラストを取材にいったとき、帰りがけにリージェント・ストリートで出会いました。取材先で履いていたのが駄目になってね。その代わりというわけ……。

ロンドンから成田までは十二時間でしよう。長旅だから、横広で

靴ひもを緩めればゆったり履けるのがよいとか、取材の連れに講釈してましたね。中年の女性で、ナショナルトラストに詳しい美形の大学教授でしたが、ちよつと色気があってね。彼女も同じ靴屋さんでナベさんになにか買って貰ったようだから、旅先でなにかあったのかもね。

もつとも雑誌が出来上がったあと一度銀座でランチしたのにつき合わされたけど、帰り際はなにか陰悪な空気が漂っていたな。女性がそれとなく誘ったのに、ナベさんが冷たく無視するような雰囲気だった。ナベさんは突然態度が変わることがあるからね……」

バリさん 「ナベさんが君を長旅に連れて行くのは、水虫で苦しんでいたから、その対策もあったのだろう。機内で靴ひもを緩めてくつろぐとかね。もつとも大抵の場合はスリッパに履き替えるけどね」

クラさん 「水虫要員とは情けないなあ。でも長旅に連れていってもらった回数では、バリさんとどっこいだと思いますよ。結構可愛がってもらった感じですよ」

バリさん 「クラさんと二人で連れて行ってもらったことがあるよねえ。ザルツブルグの音楽祭だったかなあ。そのついでに、チロルの取材もするとかで、オーストリアに二週間くらいロングステイしたよね」

クラさん 「取材で歩き回るのは小生で、コンサートとかパーティーとか華やかな舞台はバリさんだったような記憶がある。差別ですよね、ちよつと……。そういえば、山歩きするっていうので、ロバさんも一緒だった」

ロバさん 「懐かしいなあ。エーデルワイスの歌が聞こえてくるみたい……。あの頃は出番が結構ありましたね。スイスのグリンデルワルドとかマッターホルンにも行ったし、ナベさんも役員になった頃で勢いがあつた。

カメラマンも行き先と取材対象によって選んでいたけど、機内誌の発注元のN社の女性カメラマン、なんていう名前だったかな、スタイル抜群の美人でね、ジーパンが似合うのだなあ。彼女がナベさんのお気に入りだったね」

バリさん 「小生も知っているよ、いい女だったね。三十半ばってところかな。バツイチだとか聞いている。苗字は忘れたけど、名前はたしか淳子さんといったかな。プライドが高いところがあつたな。カメラマンなんていうと機嫌が悪いのだ。私はプロフェッショナル・フォトグラファーです、なんてね」

ロバさん

「山登りが好きなようで、小生の出番のときは大抵この人だった。普通は発注元の社員など使わないのだけだね。なにやら怪しい。ホテルの部屋に入ると、我々は開き戸の中に隠されちゃうよね。だから声とか音でしか分からないけど、抑え気味のメゾソプラノが時々怪しく弾けたりして……。それで誰だか分かっちゃう。真夜中なんて堪らないよね、びっくりして目が覚めちゃって聞き耳立てていたら寝不足になっちゃった……」

バリさん

「髪がバーコードで、靴をひきずって歩いている今のナベさんから想像もできないけどね。次はテイさんにいこうか」

テイさん

「イタリア取材っていうと連れて行かれましたね。最初の出会いがミラノですね。バリさんと同じで、そのとき履いていたのが、踵が剥がれてね。慌てて飛び込んだ店で衝動買いされたってわけ。」

「ハーフブーツみたいなのを履くにはまだ少し暑い季節だったのね。一目ぼれしたのかな。そのときはヴェニスでヴェネチアングラスの特集だった。イタリアもカメラマンが同行したけど、これはイタリアが専門の男性だったな」

バリさん

「Oさんいつも静かだけど、なにか特別の思い出はないの？」

Oさん

「わたしはナベさんの別れた奥さんの店から貰われてきた身分でしょう。特注とかで国産では最高級な皮をたっぷり使ってもらっているのですよ。新婚当時はよく使ってもらったものです。でも三年か四年で奥さんと別れたでしょう。それからはお蔵入りしてほとんど相手にされませんね。煙たいのかもしれない。たまに大事なお客様筋のお葬式などでお供するくらいですよ。浮いた話はまったく記憶にないですな」

バリさん

「甘い言葉と扱いなれた技でごまかされていたけど、三年もするとナベさんの化けの皮が剥がれたらしいな。すったもんだの末に、奥さんが飛び出して実家に戻ってしまったそうだ」

Oさん

「たまに見せるナベさんの冷たい目線は怖いよね。人を無視するような感じ……。特に女性にそうするみたい。やはり幼い頃のトラウマかも……」

バリさん

「一番下の階のナイキさんとフィラさんは、テニスとウォーキングだから、いつも二年ほどで顔が変わるよね。トラベルライターのナベさんの横顔は知らないだろうから、特ダネのご披露というわけにはいかないかな？」

ナイキ君

「あんまりそういうのはご縁がないですよ……」

フィラ君 「僕もないなあ。いつもこき使われて擦り切れたらポイ捨てだから」
バリさん 「コンさんはどう？ お疲れのようだけど……」

コンさん 「この間ナベさんが銀ブラしているときに靴底が剥がれちゃいましてね。駅の修理屋さんで手当てして貰ったのですが、家に戻ったらまた剥がれちゃった。もう寿命ですかね。情けない。バリさんと同じ血が流れている筈だけど、ナベさんが香港の大バーゲンで見つけてくれたので、出自にちと怪しいところがあるみたい。体質が弱いのはそのせいかもしれないとか、ナベさんが嘆いていましたね」

バリさん 「そんな寂しいこといわないですよ。もう一度しっかり治療してもらうようナベさんに言っておくからね」（お二階さんも、ワンさんを除いて草臥れきって認知症ぞろいだから無理だな、と一人呟いてから）

「最後にワンさんの話を聞こう。なにか言いたそうだよね。大分日本語も出来るようになったから大丈夫だろう？」

ワンさん 「ワタシ、中国の西安で生れた。ナベさんネ、二十年以上前に中国の取材した。最初は北京と万里の長城とか。二回目が上海で、その次が西安。ソ連がロシアになって、中国の共産主義も少し変わった頃ね。急に変わってきたので、ナベさんそれを取材して新しい旅のドステイネーションの特集にした」

バリさん 「そうだったね。大分興奮していた。すっかり中国ファンになったらしい」

ワンさん 「万里の長城には、ロバさんも行きましたよ、確か……。登るのは結構大変だからね。ワタシがナベさんに出会ったのは西安。ナベさんネ、西安取材で、その女の人好きになった。ロンさんっていう名前。通訳とガイドさん。西安の役所のお偉いさんの娘さんネ。日本に憧れていてネ。日本に行きたいけど、伝手が無い。そんなとき知り合ったのがナベさん」

バリさん 「なるほど……」

ブラさん 「その話、僕も知っています。先輩のブラ一世が旅先で行方不明になったんです。結局発見されずで、それから暫くして僕がブラ二世でお仲間入りしたわけ……」

一同、息を呑んで次の展開を待つ。訥々と喋るワンさんの話が続く。ナベさんが四十三歳のとき、開放されてやや自由になったシルクロードの東の起点であ

る西安を特集しようという企画が通った。日本の航空会社の来年からの乗り入れが内定していた。それに先立つ広報宣伝の狙いがある。成田から北京までは四時間足らず、そこから西安へは二時間の空の旅だ。直行便なら五時間に短縮されるといふ。

西安は昔の長安。古代から政治の中心地として栄えた。西周から秦、漢、隋、唐などの王朝の都として千年の歴史を有する古都である。派手な上海、やたらに大きな北京とは異なり、どことなく京都を思わせる落ち着きがある。

世界遺産の兵馬俑を筆頭に、大雁塔、市内の城壁巡り、秦の始皇帝陵、楊貴妃のお風呂があるという華清池など、史跡が数多い。

西安での滞在は三泊四日。天候次第では延長になるが、初秋で好天に恵まれた。ホテルは空港から一時間ほどの郊外にある「唐華賓館」。一九八八年に開業した当時は、西安では五つ星のホテルであった。大雁塔のすぐ隣にあり、それに見合うような古風な造り。

フロントロビーがある部分はお寺みたいな屋根になっていた。四階建てで高層ではない。二百室ほどの規模だ。どこか和風の池などがある庭を回廊が囲み、それに沿って客室が並ぶ。フロントロビーの壁一面に、田村能里子女史のシルクロードの絵が壮大に広がっていて、ここがシルクロードの起点であることを思い起こしてくれる。

日本からの観光客狙いだろうか、しっかりと味付けの料理を誇る日本食のレストランもある。カラオケ設備があり、そこには踊れるようなスペースもある。中国の開放を象徴するような、クラシックにしてモダンな設計だ。

取材班はナベさんと、旅の世界では有名な男性カメラマンAさん、それに通訳兼ガイドの中国女性ロンさんの三人。タレントなどのモデルさんはいない。

ロンさんは大学で日本語を専攻して、日本への憧れが強い。父親は西安の公安関係の高官という。ナベさんの母校の友人で中国文学を専攻したHが、西安に短期留学したときに一家と知り合ったそうだ。彼の紹介である。

到着後一夜明けて、二日目は、市内巡り。城壁を廻り、ここからシルクロードというゲイトを訪ねる。午後は、陝西歴史博物館と唐代壁画珍品館、最後は夕陽の大雁塔と忙しい。

日本との時差はないに等しいし、気温も似たようなものだから身体の疲れはない。

夜は内輪の会食。既に還暦を越えていたカメラマンのAさんは食事が終ると早々に部屋に引き上げた。まだ八時過ぎだ。ロンさんは明日の取材が早いので

ホテルに泊まることになっていた。最近の日本事情の話が日本語で弾む。ほどよい酔いが二人をカラオケに誘った。貸切り状態のところ、持ち歌を歌い合う。ロンさんも低く柔らかい声で、なんと美空ひばりの「川の流れるように」を上手に歌うではないか。すっかり意気投合してムードミュージックのカラオケで体を寄せ合いスローダンス。アルコールの入って熱くなった若い女性の香り、ナベさんの下半身が目覚めた。

歳の差は二十もあるが、こうなるとナベさんは止まらなくなる。悪い癖だ。二人の部屋は、Aさんの部屋を挟む形のロケーション。時計は十時を指している。そろそろ引き上げるか。ロンさんの足元がふらついている。左腕を腰に廻して支えながら、三階へ。

「楽しかったね。ちよっと酔っ払っちゃったけど、一杯だけ部屋でブランデーでもどう？」

「はい、分かりました。じゃあ一杯だけ……」と、身体を預けるようにナベさんの部屋に入った。

窓の外には、月光に照らし出された大雁塔が黒く望める。ホテルでの寝酒はブランデーと決めてあるから、既に舞台は整っている。ブランデーグラスはないが、普通のグラスで乾杯。一杯が二杯に……。

BGMのムードミュージックが低く流れる。部屋のライトはベッド脇の縦長のスタンドと二人が囲む小さな円卓の横のサイドボードにある小柄なスタンドに絞ってある。

三杯目が終わるころ、「わたし帰ります。明日早いですから……」と、ロンさん。

足が覚束ない。立ち上がり際、ふらついたのをナベさんが支えるのを待ったように、ナベさんの腕の中に倒れ込む。唇が柔らかく重なる。誘われるままにダブルベッドに……。

ロンさんの身体は年齢以上に熟れていて、苦しげな声が漏れる。隣りのAさんが耳を澄ませば聞こえるほどだ。

翌朝はさわやかな秋晴れだった。西安の気候には四季があり、気温は日本よりやや低目というところだ。オアシスだから、樹木も水もあるが、緑豊かな日本とは異なり、砂埃でどことなく乾いている感じがした。

取材班の三人は予定どおり七時半に朝食で集まった。ナベさんを見るロンさんの目がしっとりぬれている感じだ。行程を確認して、八時過ぎにはチャーターしたワゴン車に乗り込む。街中を通り過ぎると、左手遥か遠くには大白山など四千メートル級の山並みが望めた。

今日の目玉は兵馬俑。途中で、楊貴妃のお風呂が目玉の華清池に立ち寄ってから、秦の始皇帝陵を見学。兵馬俑についたのは昼過ぎだった。簡単なランチで腹ごしらえしたあと、世界遺産に足を踏み入れた。

兵馬俑は、始皇帝の陸陵の周辺に埋納された膨大な数の兵士と馬の俑である。史記や漢書など歴史書にはその存在が記されていたが、数々の動乱などで、所在地や存在そのものが忘れ去られていた。項羽により破壊されたともいわれる。それが一九七四年に発見されて世界を驚かせた。ナベさんが少年時代に父親に買ってもらった世界各国の凶鑑の中国編には、兵馬俑は載っていない。まだ見つかっていなかったのだ。農民が井戸を掘ろうとして偶然見つけたのが発掘のきっかけという。

とにかく万という数の兵士だから桁違いだ。現在でも全貌が分からない。発掘調査がなかなか進まないそう。驚異的なのは、人身大の兵士の庸にはどれ一つとして同じ顔をしたものはないことだ。秦の軍隊は多くの民族の混成部隊だったのだ。全ての庸はかつての秦の敵国が存在していた東方を向いているというから始皇帝の執念は凄まじい。

ナベさんはインドの独立記念日を祝う祝典を取材したことがある。ニューデリーだ。式典には、人口が十億を優に超えるインドの各地から民族衣装を着けた兵士が集まる。顔かたちも体格も皮膚の色も異なるのが印象的だった。兵馬俑の兵士たちはそれに似ているのだ。

公開されている広大なスペースを埋め尽くす兵馬俑を取材。ここでナベさんの悪い癖が出た。遺跡の欠片でも記念に拾おうという癖だ。Aさんが同行したイラクのバベルの塔の取材のとき、遺跡の欠片を内緒で拾うのを、守衛に見とめられ追いかけられたことがある。ナベさんは手にしていた数個のうち一つをこれみよがしに捨て、残りを素早く靴の中に押し込んで持ち帰ったが、危なかった。二つの石灰岩には古代文字みたいのが刻まれてあり、ナベさんの大切なコレクションの一つになっている。その成功体験が後を引いているに違いない。

ナベさん「Aさん、壁の下に飛び降りて内緒でなにか拾ってみたいですか」
Aさん「ナベさん、ここはイラクよりやばいよ。やめときなさいよ。」

香港のアクション映画で兵馬俑が舞台になったのを観たことがあるんだ。始皇帝の側近が美女との恋に狂ってね、皇帝の怒りに触れて兵馬俑に生きながら埋葬されるといふ恐ろしい筋だった。三千年後に二人とも転生するとかいうコメディっぽい結末だったけどね」

ナベさん「昔の話でしょう、開放された今頃は大丈夫ですよ……」

数分後、Aさんとロンさんが撮影の打ち合わせで話し込んでいた隙に、ナベさんの姿が消えた。

Aさん「あれ、ナベさんどこへ消えたのだろう？」

ロンさん「トイレはさっき行ったから違いますよね」

きよろきよろしていると、ピーという鋭い笛が響き、警備員らしき数人が、壁の下の広場に並ぶ兵士の庸を縫って誰かを追かけているのではないか。そして、まもなくナベさんが引き立てられて連れ出された。靴がない。裸足で兵士群がぎっしりと並ぶ広場に忍び入ったらしい。

Aさんと通訳兼ガイドのロンさんが慌てて走り寄り、取材で近くに行つて撮影したかっただけで悪気はない等々釈明したが、とにかく公安でしつかり調べるといふ。

ナベさんは裸足のまま当地の警察署に連行された。調べられること一時間。機転を利かせたロンさんが電話を借り、西安市内の父親に連絡して事情を詳しく話した。ロンさんの父親は地区公安のトップである。それが功を奏してやつとナベさんは釈放されたが、どこかで脱ぎ捨てられた先代ブラさんは結局戻らず、ナベさんは裸足のままワゴン車で帰途に。

ホテルに戻る前に、ロンさんの知り合いの西安市内の靴屋で中国製の黒靴を求めた。それがワンさんだ。

ワンさん「……というわけで、私も憧れの日本に来られたのですよ。」

ナベさんは恋しいロンさんが忘れられず、半年後には休暇で西安にまた行きました。私も里帰りしたわけです。で、ロンさんの父親・楊さんにもお礼したところ、ロンさんがどうしても日本の大学で勉強したいので、その手配と保証人役を頼まれましたね。

結局、ナベさんの学生時代の親友で西安に短期留学して楊さんと親しくなったHさんとナベさん二人が共同で保証してロンさんの夢が叶ったそうです。

それからあとのことは知りませんがね。ナベさんは独り者だし、ああいう性格だから適当にやっているのかもしれないね、ウフフ……」

眠気を吹き飛ばすような面白い裏話です。話は尽きそうにありませんが、ワ

ンさんの物語で一段落つくとき時計の針は零時を大きく廻っていました。明日の出番があるわけではありませんが、高齢者は体力的に限界です。そうでなくとも淀んでいる空気はどんより動かなくなりました。おならやら体臭やらで、臭気もますます酷くなってきました。潮時です。バリさんの一声でワイガヤは終了。皆さん倒れるように眠りに付きました。

バリさんは生まれながらのクリスチャンです。いつものように寝る前に胸の前で十字を切ってお祈りを捧げました。

「裏表があつてなにかとややこしいご主人様ですが、誰よりも深く愛してくれたナベさんが昇天したときは、お棺のなかで最後に履かせて貰って一緒に旅立ちが出来ますように……」

それからうん十年後、ジャパンの高齢化は物凄く、バリさんのご主人も平均寿命をはるかに超えて米寿を迎えました。公の場にでる機会はなくなり、外出といえどもつばら散歩だけです。よれよれのジーパンにバリさんは似合いません。

出番がなくなつて、靴箱の一面で寝るばかり…。

ある日、静かなご主人の家が珍しく賑やかです。がやがやと大勢の音が飛び交い、聴いたことがない音が流れています。お経のようです。小一時間も過ぎた頃でしょうか、儀式は終わったようで、大きな木箱の蓋が閉じられようとしています。

「ほかに入れてあげるものはありませんか？」

「そうだ、寵愛していたバリの黒靴を入れてあげましょう」

「それがいいね…」

「異議なし」

バリさんの運命が決定、夢が叶ったようです。(完)